

日本公庫「アグリフードEXPO大阪2015」開催！！

当機構販売支援先3社が出展

初めての商談会出展を側面支援 事前準備から当日の商談まで

2月19～20日
大阪市内で

日本政策金融公庫は2月19日(木)～20日(金)、大阪市住之江区のATCアジア太平洋トレードセンターで「アグリフードEXPO大阪2015」を開催し、多くの食品バイヤー等の来場者が訪れました。当機構関係では、販路拡大を支援している3社が出展し、事前準備から当日の商談までを支援いたしました。

「アグリフードEXPO」は例年8月に東京で、2月に大阪においてそれぞれ日本公庫が主催しているプロ農業者たちによる国産農産物の展示商談会で、大阪では今回が8回目の開催です。今回の商談会には全国から約480先の生産者やメーカーが出展し、多くの来場者が訪れました。

当機構関係先では、今年度販売支援を行っている農業者のうち3社が出展し、当機構のコンサルタントが出展に際して様々な支援を行いました。

出展した3社は、北海道の和牛生産者、四国の採卵鶏生産者及び九州の乾燥野菜の生産者で、このうち四国と九州の生産者は初めての大规模商談会への出展となりました。



当機構では、この初出展の2社に対して、それぞれが事業領域としているマーケットの動向や競合商品の状況等に関する市場調査結果を報告したうえで、この商談会の特徴や当日の留意事項、出展後の礼状の出し方やフォローのあり方などについて事前レクチャーを行いました。また、開催前日から閉幕

まで、当機構のコンサルタントも現地入りし、展示ブースの設営支援や試食品の配布、バイヤーへの声掛けなどのご支援しました。

初めての出展となった2社は数十社との名刺交換や商品提案を行い、それぞれが持つ商品力に自信を深めつつも、価格や取引ロット規模、パッケージングや賞味期限などにおけるバイヤーからの要望などに熱心に耳を傾けていました。両者とも今後は関心を示していたバイヤーへのフォローを行っていき予定ですが、当機構では引き続き販路拡大の実現に向けご支援していく予定です。

トップマネジメントセミナーを
3月2日(月)に開催します！

高級スーパー「福島屋」福島会長が
基調講演とパネラーとして参加！

当機構は3月2日(月)に千代田区日比谷図書文化館において「第7回トップマネジメントセミナー」を開催します。本セミナーは毎年農業や食に関する著名人を講師にお招きし、プロ農業者や農業や食に関係するビジネスマン等を対象にしたセミナーとして今年で7回目の開催となります。

今年度は、農産物や加工品の販売拡大をテーマに、都内で5店舗の高級スーパーを展開する「福島屋」の代表取締役福島徹氏が「消費者のもとめる農産物・加工品を考える」最高の信頼を得られる店をコンセプトとして売り場で取り組んでいること」と題した基調講演を行うほか、福島氏に加えて青木理紗氏、高橋隆造氏、久松達央氏の3名の農業経営者と当機構の高木理事長によるパネルディスカッション「これからの農産物・加工品販売では、農業者に何が必要か(仮題)」を行います。聴講は先着180名までとなっております。若干の空席がありますので、ご関心がある方は当機構ホームページをご参照のうえ、お問い合わせ下さい。

【事業化支援・販売支援①】

農業復興プロジェクトについては、事務局から秋まきタマネギの試験栽培と春まきタマネギの準備状況について報告し、事業を実施する市あての事業報告書(案)について説明を行いました。

コスト削減プロジェクトについては、部会員が作成した水稲経営統計に関する資料に基づき意見交換を行いました。実際に稲作経営を行う経営者などからは、規模拡大を推進して減価償却費と人件費を削減できても、それ以外のコストを削減することは容易なことではないことなど、現場で感じているコスト削減の難しさに関する意見などが出されました。

今回は、これまでの検討内容を踏まえて、意見交換を行う予定です。

【事業化支援・販売支援②】

前回の部会での意見交換結果を踏まえ、各会員から提供可能なサービスやノウハウについて提示してもらい、各会員の専門分野や得意分野の共有化を図りました。

個別案件では北海道の生産者によるスナック菓子の商品開発をテーマに検討しました。

検討では、まず事務局から生産者の概要や今回の商品開発に関する経緯等について説明がされ、その後、部会員による討議を行いました。討議では、輸入品との違いや国産材料を使用していることを強烈に印象付けることの重要性を指摘する意見や持ち運びの良さや手を汚さずに食べることが可能となるパッケージの紹介、利用シーンを幅広く想定し、高級スーパーやコンビニ等販売チャネルも広く検討する必要性についての指摘など、様々な論点から意見が出されました。

次回も同じテーマで討議する予定です。

【事業化支援・販売支援③】

今回は今後取り上げる具体的な案件を選定するために、事務局から候補案件の概要を説明

し、部会員同士による意見交換を行いました。その結果、この案件を今後継続的に取り上げ、その案件に相応しいビジネスモデルや考えられる様々な課題やリスク、それに対する具体的な対応方法等について討議を行っていくことを確認しました。

具体的な案件の概要は、西日本で野菜栽培を行う農業法人の若手経営者が北日本で新たに栽培適地を見つけてリレー栽培を行いたいという事業構想に関するもので、今後は必要な調査や課題設定、討議の方向性等を検討予定です。

【人材育成】

3月2日にJ-PAOが主催する「トップマネジメントセミナー」について、その概要を事務局から説明を行いました。開催に関する周知の仕方等について、各部会員から意見をいただき、今後の聴講者募集等に反映させていくこととしました。

また、前回に引き続き、企業派遣型課題解決ワークショップ研修の進め方について意見交換を行いました。

□ 主な活動(12/25~2/23)

- 12/25 青森市第2回マネジメント部会(高田)
- 1/14 第88回企画運営委員会
- 1/13 岡山県農業参入セミナー(伊藤)
- 1/15 山梨県農政部(高田)
- 1/21 JA全農みえ(高田)
- 1/26 青森市第3回マネジメント部会(高田)
- 1/28 日本公庫福島支店農林水産事業(長岡会員)
- 2/1 日本農業経営大学校(丹羽顧問、阪下会員)
- 2/3 栃木県農業ビジネススクール(農業経営支援センター)
- 2/6 日本公庫甲府支店農林水産事業(阪下会員)
- 2/8 日本農業経営大学校(都築会員)
- 2/12 第89回企画運営委員会
- 2/17 栃木県農業ビジネススクール(農業経営支援センター)
- 2/17 JA和歌山県信連(伊藤)

往復書簡

今回からは、株式会社株式会社あつぷふあーむソリューションズの高橋隆造社長と当機構理事長の高木勇樹の往復書簡が始まります。高橋社長は、米生産のほか、食味値を訴求した新しいお米ブランドを立ち上げるなど、斬新な取組みで農業界に新しい風を吹き込んでいます。

拝啓 高木勇樹様

立春とは名ばかりの寒さで、梅のつぼみもまだ堅いようですが、高木理事長におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

体調を崩したのをきっかけに、仲間二人と共に鳥取県の山間部へ「ターン」し、野菜とコメ作りを始めたのが平成21年。そこで私は、「長年農業に携わっておられる生産者の方々が、美味しいものを生み出そう」との思いで休み無しの過酷な労働を続けているにもかかわらず、多くの生産者が期待通りの利益が得られていないという厳しい農業生産の現実に向面しました。こうした現場の状況に対して、「もつと積極的に農業改革を！」とは言われるものの、農業生産者が主体となる具体策が乏しいという現状に対し、「低迷する日本の農業を、独自の企画力で改革したい！」という思いを持ちながら、今日まで続けてきました。

地域自慢のお米を高値で流通させることを目指して始めた企業向けの田んぼのオーナー制度「水田オーナーズクラブ」。開始5年で全国4拠点、参加生産者数70戸以上、オーナー数が100社を超えました。

そして、自分も生産者として出品を始めた「米・食味分析鑑定コンクール・国際大会」を通じてお米の成分を計測し、数値化した食味値というものに魅了され、その数値を前面に打ち出す販売方法を立案しました。お米の品質本位で勝負できる、農家さんの努力が価格に反映される仕組みです。これはコンクールを主催する米・食味鑑定士協会の鈴木会長のご支持もいただき、平成25年に「米風土（まいふうど）」ブランドとして立ち上げました。これも多く

の方々に認知されはじめ、百貨店やスーパーでの取り扱いが拡大しつつあります。

今後の取組みとしては、多くの高品質な農産物の更なる安心と安全をお約束できる仕組みを導入し、農業への関心を高め、日本の農業を更に成長させることを目指して立ち上げた「JAPAN FARM AWARD 協会」の活動を通じて、日本の農業界の発展のために、努力していきたいと思っております。

平成二十七年一月吉日

敬具

高橋 隆造（たかはし りゆうぞう）

一九七四年 大阪府豊中市生まれ
二〇〇九年 鳥取県に「ターン」し、農業法人株式会社あつぷふあーむを設立。農作物の生産を開始。水田オーナーズクラブを発足。
二〇一三年 グループ会社株式会社あつぷふあーむソリューションズにて、お米ブランド「米風土（まいふうど）」の販売を開始。



上段：高橋社長

下段：当社の「米風土」シリーズ

拜復 高橋 隆造 様

二十四節気では立春が過ぎれば二月十九日は恵みをもたらすとされる雨水。日だまりにいと確かに春を感じさせるきょうこの頃です。三寒四温の気候で、特に私のような年齢になると体調管理に気を使います。

貴兄に初めてお会いしてお話をしたとき、感性の豊かな方、私流にいえば森羅万象に対応可能なものさしをお持ちの方と感じました。

その思いは昨年六月二十日でしたが、高橋さんのあつぷふあーむソリユーションズ主催のお米のイベントにお招きいただき、その斬新さ、来場者の多様さを目の当たりにして、確信に変わりました。

お米関係のイベントだからどうせダサいに決まっていると。ところがイベント会場は渋谷区猿樂町の住宅街のしゃれた一角、集まった方も若い女性中心に多様。戦前生まれの小学生の度肝を抜くのに十分でした。

更に食味の点数で価格設定した「米風土(まいふうど)シリーズ」という商品設計にも時代の先をとらえる感性を強く感じました。

ジャパンタイムズの方に続き「あいさつ」をさせて頂いたのですが、予め心の中で用意していたセリフが全く場違いなことに気付き、とても焦ったことを昨日のように思い出します。

「…私の時代はお米は主食で、無条件に大切なものと教

えられました。今日この場に来て、大切なものだけとお米は楽しむもの、自分で価値を見つけるものになっているのだと思いきらされました。」というようなことをしどろもどろに話したように思います。

お手紙の「独自の企画力で改革したい」という思いの真の狙いが、あのイベントに参加させて頂いたことで良く理解出来ましたし、農業が総合知識集約産業であるにもかかわらず、高橋さんのような方とのコラボがないと、その真の価値を実現し、もうかる経営につなげられないのだと実感しました。

そしてこのJ・PAOのひとつのミッションはそのような取組みをされる方々のプラットフォームになることだと考えますが、高橋さんのお考えを次回お聞かせ頂ければと存じます。

平成二十七年二月吉日

敬具

高木 勇樹(たかぎ ゆうき)

一九四三年

群馬県生まれ

一九六六年

東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年

農林水産事務次官、二〇〇一年退官

二〇〇二年

農林中金総合研究所理事

二〇〇三年

農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任

二〇〇七年

NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

